

小田原史談

第40号

会史談目内
原丁館
小田原市幸一
所小田原市文
発行所小田原市郷土

印刷の御用は
清水印刷
小田原市幸一ノ一七
電話小田原三四七七番

小峯公園の思い出

小田原と言えば梅、梅と言えば小田原と言われるほどむかしは有名であった梅も、小峰公園がつぶされて段々丘も地ならしされて野球場ができ、次で今の競輪場となつてから、小田原に文人墨客の杖を曳く人も少なくなつて、名のみとどむる梅干しも下曾我や近郊の出産が多い。郷愁を感じる者、われらのみであるまい。観光都市の小田原に古来由緒ある梅樹の跡なくなったのは淋しいことである。長興山か又は一夜城跡を囲んで梅の公園としたらどんなものであろう。
(梅 上垣侯島画伯筆)



二月十一日を紀元節とする根拠について

養田長平

二月十一日を紀元節とすることについては、多年費否両論にわかれて、いまもって決定をみるに至らなかつたが、このたび、佐藤首相の発言により、いよいよ政府案として議会で祝日改正案を提出するとの報道に接したがこれもウヤムヤの裡に立消えとなつてしまった。

内山本県知事が率先して、本年より二月十一日に行事を行なう旨を発表して、これに反対する声も相当聞えたが、問題は紀元節には異論はなく、何等根拠なき二月十一日に定めたことに多くの非難があつたようである。明治政府が二月十一日を紀元節に定めたことについては相当の根拠がなければならぬ。これについて明治四十年故久米邦武博士が明治学院において十回に亘り講演され、それを作家並びに宗教家の沖野岩三郎氏が筆記され、博士の検閲、加筆を経て警醒社より発行された中に、紀元節の起原について詳しく述べられている。頗る難解であるが、左にその記事を転載して、ご参考に供したい。

紀元節の起原

本朝経緯学の大家三善清行の建白書に「辛酉を革命と爲し、甲子を革命と爲す」と言う説の緯書についてその趣きを考へる一端が、日本の紀元節の起原であります。神武天皇の紀元々年から欽明天皇頃まで年数に不確定

な所があります。元来神武から暦は無くして押通して来たものを、神武天皇の時から突然暦を用い出したというのは不思議な話であります。けれどもそれには必ず起原がなければなりません。そこでこの点を研究した結果、とうとうその原因を発見したのであります。

「辛酉革命を爲し、甲子革命を爲す」という句は易緯にある言葉で、詩緯には「十周參察、氣性神明を生じ、戊午革運、辛酉革命、甲子革政」とあります。日本ではその易緯の方を採用していたので、辛酉には革命あり、甲子には革命があると信じていたことは、三善清行が昌泰三年に菅原道真に辞職勧告をした文中に「明年辛酉、運交革に當る」の句があつて、最後に「勿忽鄙言」といつているのでもわかります。

日本の暦を見ると、斉明天皇の七年に、天皇が朝倉の宮でお崩れになつた辛酉の年を起原として、元明上皇の崩御が辛酉であり、元正天皇のご讓位が甲子であり、光仁天皇のご讓位が辛酉であり、醍醐天皇の四年が辛酉に當るので延喜と改元してあり、村上天皇の天徳五年が辛酉なので応和と改元され、その四年後が甲子に當るので、康保と改元したのを手始めとして、それから明治天皇が一世一元とお定めになるまで、八百五十年間、正親町天皇の一朝と、後水尾天皇の辛酉の年を除く外は、辛酉と甲子には必ず改元の事があったものです。それ程勢力のあつた辛酉革命と甲子革命とは、全体どういふ原理から割り出した理屈かという事を知るには、なかなか困難な事でありませぬ。

春秋緯に「天道遠からず三五にして反る」とあるを註して「三五は王者改代の際会なり、解くこの際に於て自新初の如し、即ち道無窮なり」とあるのを、後漢の鄭玄字を庚戌という博士が、この三五を説明してあります。その説明はこうです。

「六甲元と爲し、四六二六相乗じ、七五三変あり、三七相乗じ、廿一元一部とす、合せて千三百二十年」

この説明を読んだだけでは、やっぱり何の事だか判らない。種々と考へて見ても誠に難解な算術で殆んど閉口

しない者はありますまい。
三善清行は算道の家を起した学者でありますから、これを斯う解釈したのです。

六甲元を為すとは一甲十年、六十年が一元という事。四六二六相乗とは四六二四十年と、二六二二十年と合計三百六十年である。

七元三交有りと三百六十年へ一元六十年を加えて、六七四二二十年、此間に三度の交事があるという事である。

三七相乗、廿一元一部を為し合千三百二十年とは、廿一元の千二百六十年に一元六十年を加えて千三百二十年となるのである。

此の七元三交、二十一元一節説を読んで、そこで日本歴史を見ますと、齊明天皇の九州へ行幸の後朝倉の宮で崩御になったのが「辛酉」の年で、その翌年に天智天皇のご即位になられたのが、ちょうど一節の紀元千三百二十年になっていきます。

これで鄭元の説明に合う所から、当時の学者が辛酉は革命の年だということで、齊明天皇の崩御の年から、神武天皇のご即位なされた年まで逆に計算して、その間を千三百二十年としたので紀元々々が辛酉の年に当るのです。この辛酉から辛酉まで三十七朝千三百二十年が、春秋緯に謂うところの一節だと決定して神武紀元々々年を定めたに相違ありません。

これは那珂通世君も苦心して研究した結果これに違いないというところまで調べつけられたのであります。そこで日本の紀元節というのは斯ういうわけで、昔の学者が鄭元の緯書説を採用して年数を定めた上、その紀元の日を二月十一日と決定したのであるという事を申し上げてご参考に供する次第であります。



日本人の忘れ物

祖国と国旗を忘れるな

S・P・Iの特派員のヤン・デンマン氏の言葉によれば「戦後の「日本人の忘れ物」として

「戦後、日本人には、大事な二つの忘れ物がありはしないか、その一つ、それは自分自身の所属する基本的な共同社会としての祖国というものが、如何に大事なものであるか、ということとを、戦後の日本人は忘れていたのではないか。これが一つ。

もう一つは、その祖国を象徴する国旗、日の丸の旗というものは大切なものである、ということさえも忘れつつあるのではないかと、言っている。外国人にこう言われてみると、我々日本人は、今更の如く反省させられて、何とも言えない気持ちになる。

終戦後、最初に、祖国と日の丸を言い出した一人に、当時文相の天野貞祐博士がある。曰く

「國民がGHQに遠慮して国旗を出せないというのは、日本人はだんだんと

祖国——即ち故郷を失って行く、ドイツ語で言う Heim (故郷のない人間) がふえて行く。故郷を失うと、人間として無責任になる」(日本の新学期)

以上の記事を見て思うことは、過日山知事が発表された紀元節の行事である、これには賛否両論があり、可否の問題は暫く描き、日本も終戦後二十年を経て、いまなお記念日の確定を見ざるの甚遺憾とするところである。与論の統一など現在の状況より観察して、前途なお遠慮にして、何れの日か果して確定を見るべきか。これが国民感情に及ぼす影響を思えば、転だ寒心にたえぬものがある。内山知事が一石を投じた英断は、可否は別としても、私には大に敬意を表すものである。

私。私が昭和三十八年新年号小田原史談会々報に白と御神体と言う題名で書いた時、ある学校の先生から笑われた事がある。

先生が言われるのには「内田さんは、あんな助平な事を書かなければよい人だかなア」と言われた。その時私は「先生あなたにはこんな事は書けないでしょうもし先生がこんな事を書いたなら、早速PTAの問題になつて、あんな先生には大事な子供をあずけておくわけには行かないと言う事になる。私ならば問題はないう言葉通り気軽になんでも書ける」と言つた事がある。どんな人にもお色気はある筈である。ただ口に出して言うか言わないかによつて助平であるのか、ないのか批判されるのではなからうか。又こんな事を書くことが皆様に笑われるでしょうが初春ですでお許し下さい今年には巳年、つまり身の美しい美人の代表を弁天様のようにだと言う。弁天様に付きままとわれれば、こんな結構な事はないが、弁天様の御神体は蛇だと言われている。お正月のしめ飾りの一

巳年を祝つて

内田 武雄

昭和四十年の初春を迎え皆様と共に喜び申し上げます。

つにゴボウじめがある。これも蛇である。蛇がさかっている時には男女二匹が纏つたようによれて八時間から十時間もの長い間つながらっている。こんな精刀の持ち主はほかにあるまい。私たちは何も知らずに古代から祖先の教えを受け継いで神棚にお祀りしている事も、このごろになつてようやくわかるような気がする。この地方では年神様に新しいあさと手ぬぐいを下げてあつたのをよく見かけるが、これもあさは古代より才と呼ばれ、つまり強い男を意味している。手ぬぐいは女のかぶりもので女を意味している。古代からの性器崇拜は無言のうち至今尚受け継がれているのである。私は民族の榮え行くことを心から神様にお祈りし筆をおく。

暴風の吹きすぎた野も
可憐な草花にかざられる
地震に崩れた土からも
清らかな泉が湧く。
火事に焼けた焦土にも
草の芽がもえるのである
(バイロンの詩の一節)

雛まつり考

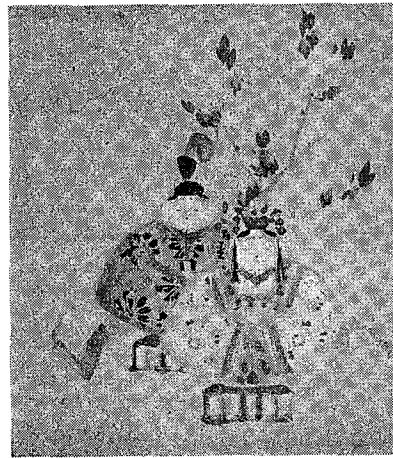
浅見 靈風

時は弥生、野山に陽炎たち晩梅を追って桃花目を楽しませ、桜の蕾はふくらんで冬眠の虫地上に春を謳歌し、人また身気浮いて我が生命を讀る三月(月遅れの所もある)雛祭りの行事が古来からの民俗風習である。

終戦後二十年、物資は欲して有らざるなく、特に婦人の衣裳は老若を問わず和装へかえり、正衣盛装は殆んど和服となり、年毎に豪華に麗美を競うてきた。ために雛飾りにおいても益々高価品が出廻っている。

長女の生誕を祝っての親心、それは同感するにやぶさかではない。が妹に生れたばかりに祝って貰えないでよいだろうか。長女の特権を認め豪華な飾り雛を祝うから次女以下が無視されることは新憲法下の現代に適しない旧習と言わざるを得ない。須らく男女の別なく長次の次なくその人権は同一に尊重すべき時代ではあるまいか。

祭りの発生と目的、及び雛人形についての歴史を「大百科事典」から抜粋して、意義ある正しい雛祭りを行なわれる様書いて見る。



雛とは小さく可愛らしいという事で、即ち雛型人形というべきである。最初は今日の姉妹遊びの紙人形の称で「源氏物語」にも見える。遠く王朝の昔からの

味を認識して祝う家庭が幾程あるだろう。知らないが故に間違った祝事をする。それでは本来の顛倒を招くのも当然となる。と共に華麗に過ぎて差別を生ずることとなるので、ここに雛

存在であって、形代の神事をなしている。つまり遊戯と宗教との合体が漸次混和し、それに親子の情愛より起る必然的な迷信も加味され、立雛は時と共に美化され、足利期に入るに及んで今日言う人形雛即ち座り雛の前提たる室町風の雛の出現となり、続いて徳川期に至ってその泰平と共に年中

た。同時に数度の禁令と維新の大変にこの雛飾りも全くその影をひそめたが、たまたま日清日露の戦勝の余波は國粹の復興を呼んで、五月人形の男性的な節句の復活より雛人形の要求となり、今日の盛大を見るに至ったものである(大東亜戦争による衰退期がこれに続いて到来したが戦後十年頃より年を追って復興しつつある)。

なお雛人形としては、次郎左エ門風と称する円面引目鉤鼻の高雅な作法と、長面にして描目になる享保風の雛人形顔面があり、今日見る玉眼製作は天保以後の所産と見て差支えないようである。種類としては右の外に銀鷄雛の如く作者名によるものと、寛永雛の如く年号を冠したものと、琉球雛薩摩雛、越ヶ谷雛の如く土地名に呼ばれるものがある。

この様に王朝以降奈良朝時代は、女兒出産の場合紙人形を作り幼児の無病息災を祈って身体を撫で、身替りとなつてもらい、近くの清流へ流したのが雛祭りの源である。然もこの風習は皇室から始まり教世紀のうちに王族から王臣に伝わり

戦国時代以後は大名から家臣、つづいて一般民衆に伝播し、足利時代に至って民族行事の一つに加わった新しい風習と言えらる。明治時代まで古い雛に我子の病厄災難を託して川へ納める風俗が見られたものである。豪華な雛段飾りをして見栄を競うのと、よしや一枚の半紙で作った紙人形でも可愛い我子の身体を撫で、いつか遭うであろう病災厄難を委託して清流に納めるのと、何れが勝るだろうか。只管雛段の美しさに眼をくらまされることなく行事の真の目的を失われぬよう書いて見た次第である。

文苑

梅咲いて風はをりをり雲崩す
梅浄し月の一枝の光映ゆる
もの影梅の香深く覚えけり

広沢十五夜
枯るる野に心一とすじ乱す
まじ
霜柱踏めば消つぐ足の冷え
暖炉背にしてうたがたの涙
秘め
梅咲いて風はをりをり雲崩す

編集後記

▼紀元節の起原についての久米博士の説明は極めて難解で、一読しただけではわかりそうもないが、よくここまで調べあげたものである。同じく研究された那珂博士とともに謹んで敬意を表したい。

▼二月十一日説には相当三反對者も多いが、戦後二十年にもなつて未だに決定を見ないのは、政治の貧困さを表すものである。国民と論の統一されるまで待つべしとの意見もあるが、日本の今日の国情から見て与論の統一など到底望み得ないことと思う。

雙 虫 庵

早春
蓼田 長平

寄せ蝸
山崎 栄子

思ふ友寄せ蝸かこむ暖かさ
師走も春の心地こそすれ

佐藤 春子

<p>小田原信用金庫</p> <p>小田原市幸1の179 (電話(0465)23121)</p> <p>理事長 鈴木十郎</p>	<p>十字町支店 (電話25121代) 緑町支店 (電話25124代) 湯本町支店 (電話箱根(5)5518-9) 国府津支店 (電話472191-2) 鴨宮支店 (電話472138代)</p>	<p>日本交通公社協定</p> <p>旧本陣 古清水旅館</p> <p>小田原市幸町巻丁目・宮の前</p> <p>電話 { 22 0 3 3 6 { 22 2 2 1 6</p>
---	---	---

<p>御料理 仕出し 御弁当</p> <p>東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL (0465) 5061~2</p>	<p>楽しい生活</p> <p>明るい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5388~9</p>	<p>神奈川県建設協会 小田原支部</p> <p>小田原市綱一色373 電話(0465)20084 4288 4289</p>	<p>小田原駅前</p> <p>あさひ</p> <p>食堂</p>
--	---	---	--

<p>あなたの暮しのムードをつくる</p> <p>婦人・子供の店</p> <p>小田原 メリヤス</p> <p>小田原市錦通り 3837 TEL (0465) 3864</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社 星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>酒・ビール・食料品</p> <p>今井重雄商店</p> <p>小田原市幸三 電話22234~5</p>	<p>写真</p> <p>イガラシ</p> <p>小田原市幸3 TEL 2534番</p>
---	---	---	--

<p>きそば庵</p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>あなたの洋品店</p> <p>はふや</p> <p>小田原幸町 TEL 2307</p>	<p>家庭電化で明るい暮らしを</p> <p>(有) 岡田電器</p> <p>小田原市十字1の22 電話 2613, 5308</p>	<p>有限会社 あめあるよ</p> <p>代表取締役 川口 浩</p> <p>小田原市曾我谷津616番地 電話 (0465)473808番</p>
---	--	--	--

<p>印刷の御用命は</p> <p>有限会社 鶴井印刷所</p> <p>小田原市緑三ノ二七 電話 2421-7</p>	<p>料理割烹</p> <p>だるま</p> <p>小田原市幸1~10 TEL 4128</p>	<p>セトモノの御用は (陶磁器・陶管・植木鉢)</p> <p>有限会社 大川商店</p> <p>TEL 8513・3055</p>	<p>浄化槽の清掃修理</p> <p>小田原市緑1の47</p> <p>小田原衛生株式会社</p> <p>電話 25861・2468番 取締役社長 鈴木 浩</p>
--	---	---	---

<p>電気工事一式・設計・請負 販売修理</p> <p>兵藤電気商会</p> <p>小田原市下曾我駅前 電話国府津473578番</p>	<p>建築用材一式 (建築御用命一切承ります)</p> <p>稲葉材木店</p> <p>小田原市十字1~23 電25621 新玉3~751 電26884</p>	<p>杉山康輔会計事務所</p> <p>小田原市新玉2~276 電話 25722</p>	<p>☆丁寧迅速の 清水印刷株式会社</p> <p>小田原市幸1ノ17 電話 23477番</p>
---	---	--	--